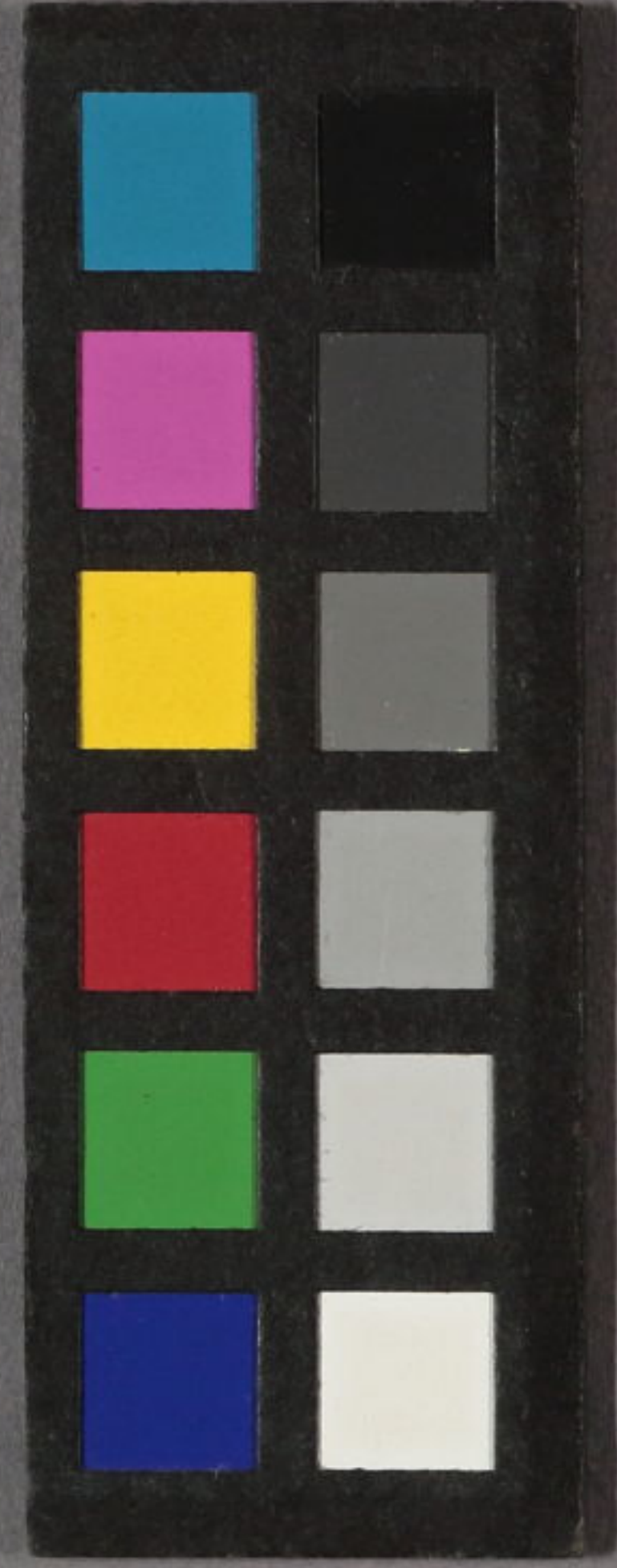




^ 13
2906
13



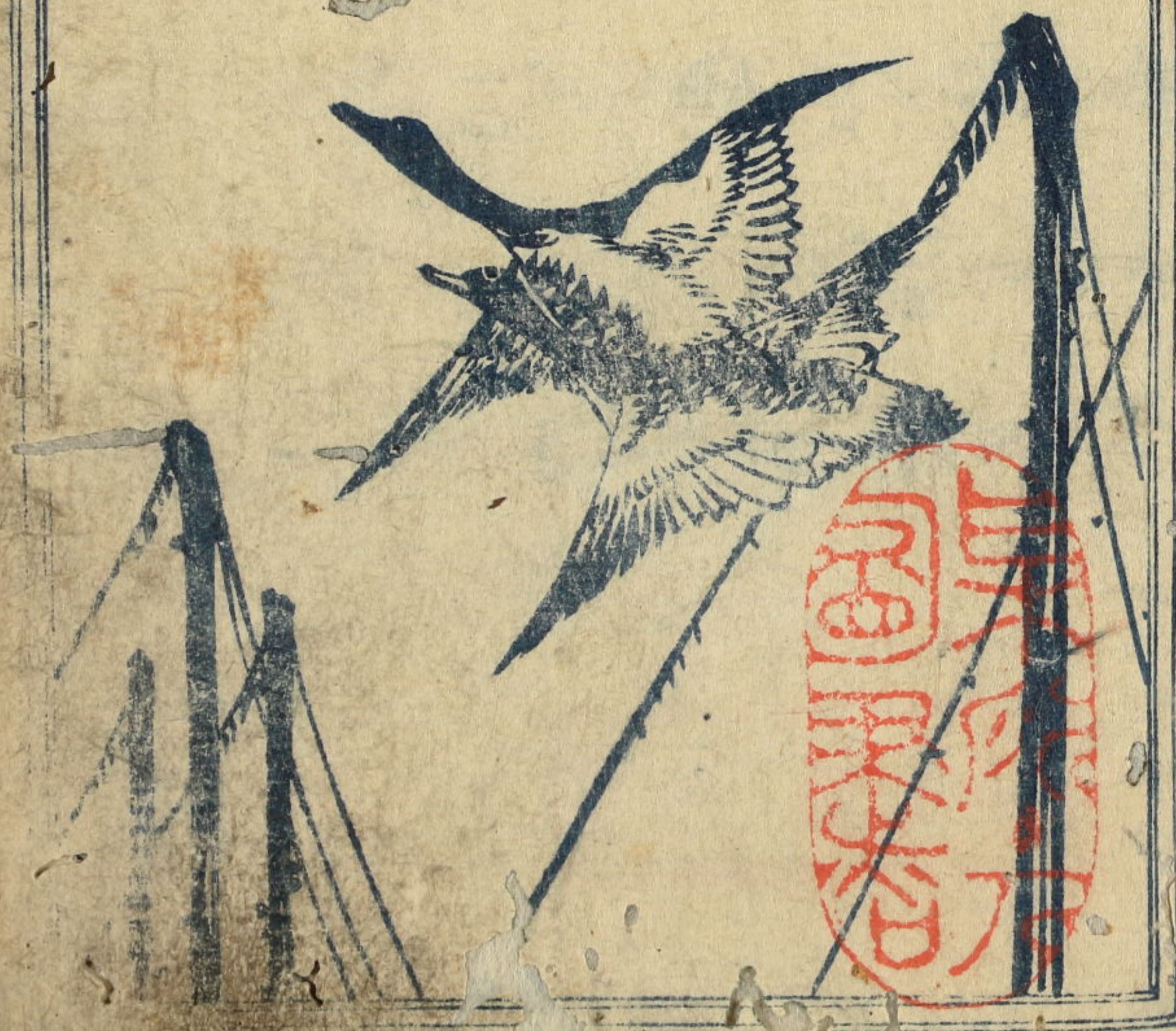
門 へ 13
號 2906
卷 13

昭和九
七月五日
晴未

高水欽
明治十五年

影清
上
夜も

浦北
狂詠舎
春曉





三

ちりきりきりきり
きりきりきりきり
きりきりきりきり
きりきりきりきり



靜
英
一
画

江戸東

考とづとまとる

山崎
 の
 補
 が
 多

經史子集



春江

信

三

寇客乃

て
お
な
う

浮

所為

法



英一画

春曉八幡佳年五編卷一

江
戶

爲永春水著

第五卷

[illegible]



其女も再会をすうぐ迷ひの晴る迄をさるる ハナミツカド
左花でござるすいひかゝりともやうく戸姫を川へ流して尋ねませ
傳へやす直ぐの當所をかきりしに松へ入ら来すの今明日
の仲小糸種く法合があらてまじりのまふるをさるる
まふし胸の思ひ當るともある依てまづは家をつて東の
方へ来る要なづかう跡よりいそぐ再会は彼地でのみうも
おとやきぬしひよるをさく身づくるひもせは言葉すけ
あふ湯本をまじ湯へうてなるといふ底人育其の國は

をちうけるがす向の父方にたうて思人の言葉のことく
まふし胸の思ひ當るともある依てまづは家をつて東の
方へ来る要なづかう跡よりいそぐ再会は彼地でのみうも
おとやきぬしひよるをさく身づくるひもせは言葉すけ
あふ湯本をまじ湯へうてなるといふ底人育其の國は
の者も相續さるるこふ極り目教までお直をばさるる
東へくる所うへお家の病氣も全度おけるお家同じく
離るるお時お表柳を直さるる様みて湯本へまじ湯を
門の字八と使ふ連れ四へ日後より志良木の店へおしる
用をせ候て後柳を直の身上に相續ふおびけるもぞ

